

2020年7月12日 礼拝説教要旨

詩編講解説教22 「望み尽きても」

詩編22：2～6、マタイ27：45～46

2節「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか」この部分は主イエスの十字架上の言葉としてよく知られた言葉であります。実はこれだけではなく、この22編の前半部分は「嘆きの詩編」となっておりまして、この中で幾つかの部分はキリストの受難を思い起こさせるものとなっています（9、15、16、19節等）。ですからこの第22編はキリストと切り離して読むことはできません。もちろんこの第22編だけではありませんが、詩編を読みますとそのようにキリストが鮮やかに浮かび上がってくるという経験をいたします。

でもそれはそれだけ主イエスが詩編の御言葉を愛しておられた。御言葉に合わせるようにして歩まれたということではないでしょうか。この地上での最後の時も詩編の御言葉と共にあられたのです。だから詩編を読むとキリストが浮かび上がるのです。それはイエス・キリストが受肉した神さまの言葉と捉えるならば当然なのですが、しかしこのことはわたしたちにとっても決して無関係なことではありません。わたしたちは洗礼を受けてキリストに結ばれました。それならばわたしたちもまた、キリストによって御言葉に合わせられ一つにされているとすることができるのです。だから御言葉の通りに、主イエスが生きられたように生きることができる。信仰者というのは、そういう存在なのです。わたしたちはそのことをもって積極的に受け止める必要があります。

わたしたちは、自分は罪人だから聖書の通りには生きられない。頭からそう考えてあきらめていることがあります。でもローマの信徒への手紙に「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることになると信じます」（6：8）とあります。これは洗礼を受けた者のことを言っているわけですが、洗礼を受けるということは、罪の自分がキリストと共に十字架で死に、そしてよみがえりのキリストと共に新しい命に生きる自分が立ち上がることなのです。わたしたちはキリストに結ばれて新しい命をもう生き始めています。ルターは改革運動の困難な中でも「自分は洗礼を受けている」と言い聞かせて自分を奮い立たせたと言われます。失敗しても、うまくいなくても、そこで洗礼を受けていることを思い起こして、悔い改めて、またやり直す。わたしたちの人生はその繰り返しではないでしょうか。

第22編の前半は特に「嘆きの詩編」と言われます。ここはわたしたちが人生で経験するあらゆる嘆きを表現しています。わたしたちの心の叫び、嘆き、呻き、悲しみをわたしに代わって表しているのです。北森嘉蔵先生をご存知でしょうか。熊本のご出身で第五高等学校（熊本大学）を出てルーテルの神学校に進まれ、さらに京都大学で哲学を学ばれて、それから東京神学大学の教授として長年勤められました。『神の痛みの神学』が有名ですが、『詩編講話』という小さな本を出されています。その中で北森先生が面白い表現を用います。「聖書は自分についてきてくれる、自分に間に合ってくる」

先ほどは、自分を御言葉に合わせるということを申しましたが、ここでは聖書、御言葉の方がわたしに合わせしてくれる。わたしについてきてくれる。わたしよりわたしを知っている。

だからこそわたしも御言葉に合わせることができると言えるのだと思います。ではわたしについてくるというのはどういうことでしょうか。「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか」(2節) わたしたちも人から見捨てられたような経験をしましょう。自分一人になっているように感じることもあるのです。そして神さままで「わたしを遠く離れ」「呼び求めても答えてくださらない」ように感じる。そういう深い孤独を感じることがあります。でもそうでしょうか。

4～6節に注目してください。この部分の「先祖」とはアブラハムから続くイスラエルの先祖の物語とまず理解することができます。歴史を振り返る時に絶えず神さまの守りと導きがあったことを詩人は思い起こさずにはおれないのでしょうか。それは出エジプトの出来事でもあり、捕囚からの帰還かもしれません。またもっと身近な家族の物語かもしれません。申命記にこういう御言葉があります。「主御自身があなたに先立って行き、主御自身があなたと共におられる。主はあなたを見放すことも、見捨てられることもない。恐れてはならない。おののいてはならない」(31:8) これはエジプトを脱出してカナンに入る時に語られた言葉です。40年の荒れ野の旅路を守られた。人生を振り返ると一人孤独に思うようなこともあったけれども守られてきた。主と共におられ導いてくださった。わたしたちはそのように過去を振り返ることができるのです。この教会も過去に戦争があり、水害があり、最近では地震がありました。でも不思議と守られてきました。「依り頼んで、救われて来た」歴史があるのです。

そしてそれがはっきり示されたのがイエス・キリストの救いです。キリストによって御言葉の方がわたしに限りなく近づく。合わせてくれる。神さまと共におられ決して遠く離れていないことが分かったのです。それはこのわたしたちの叫びをキリストが叫ばれたからです。「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか」このわたしたちの孤独の叫びを御自分のものとされた。先回りして、神さまがわたしたちの経験する悲惨をすでにあの十字架で経験された。いやもっと深いところで御自身をわたしたちに合わせられた。キリストがそのことを示しているではありませんか。

この詩人は「あなたに依り頼んで、裏切られたことはない」と言い切ります。わたしたちは裏切るのです。アダムに始まり、イスラエルの歴史も裏切りの連続でした。キリストは愛する弟子に裏切られた。そこで普通望みは尽きるのです。もう見捨てられても仕方ない。でもそこからが神さまの恵みの時です。それでも神さまは救いの約束を守り続けられます。その望みの尽きたところでも望みをつないでくださった。だからわたしたちは希望をもって生きていけるのです。

天の父よ。詩編の御言葉によって十字架の主のお姿を仰ぐことができました。この十字架のキリストによって、あなたがわたしたちを決して見捨てられないことがわかりました。どんな困難の中にあっても、このキリストゆえに、あなたに依り頼んで生きていくことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。